

みずほ Mizuho

題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん
(旧姓田代)の筆になるものです。

読書にみる「癖」

二宮 皓 (短期大学 特任教授)

本を読む時には、赤鉛筆で線を引いたり、マーカーで印をつけたり、折角の立派な装丁の「図書」であるのに、見るも無残な姿にしてしまう。本に申し訳ないと思うが、「読んだ」という確信を得るためには仕方ない「暴力」であると許してもらおう。退職し、研究室から自宅に「本」を持ち帰って数年経っているが、今日まで段ボール箱に入ってしまった「開かずの本箱」になってしまっている。どこに何があるのかさっぱり。時に原稿を依頼されても、引用しようと思う資料がどこにあるかわからないので、「まあいいか」と横着をきめてしまう。

ある時、終活ノートや断捨離の話聞き、自分の歳も考慮して、箱ごと「Book One」に持ち込んだ。ほとんどの本は「引き取り拒否」ということになった。店員の方が申し訳なさそうに、「当方で廃棄しておきましょうか」と言ってくれたので、「そうですか」と言ってお願いで帰った。以来段ボール型本箱はそのままである。大学でも図書所蔵しておくスペースがない。中世大学以来、書籍を保存するのが大学の大きな使命であったが、もはやデジタル時代においては「現物」は面倒なのかもしれない。

けでなく「メモなどの書き込み」も癖になった。アメリカに留学した時も、本(パイパーバック)は自分で購入し、(緑のペンで)線を引き、索引代わりのメモを書き込んだ(訳語も)。

しかしその癖がもたらした副産物もあった。これにはある意味感謝すべきかもしれない。それは「速読」に近い訓練ができたことである。線を引き、まるで囲むことで、重要部分を中心に読むことを覚えた。文学作品であれば、それは決して誇れることではない。言葉表現や行間を味わいながら、時には感情移入して読むからこそ、感動があり、深い理解ができるのである。

択能力が不足していたので、世界文学全集(河出書房「世界の名著」(中央公論社)などをそろえて読む(飾る)。漱石も文庫本で全集的に読破した。

卒業して「職業としての学問」(マックス・ウェーバー)を生業とするようになる、読書は終わりをあげ、書籍が「資料」に変質してしまった。愉しみなどはやらない。赤鉛筆の復活であり、本を「斜めに読む」(速読)の技を駆使する本読みとなってしまう。もはや吉川英治や山手樹一郎を読むこともない。読書は心の糧というが、本当にそうだと今にして思う。空腹(心)やどのの渴きを感じる今日この頃である。晴耕雨読の「癖」も身に着けるべきであった。

本とのかかわり

高木 恵美子 (短期大学 助教)

一番本を読んだのは小学生の頃だった。友達とひと月に読んだ本の数を競い合っていた。クラスの中で毎月の貸し出し数が一番になるととても嬉しくて、とにかく色々な本を読み込んだ。そして1つの本を読み終わったら図書室に行き新しく借りて読むという繰り返しだった。なぜそんなに夢中になって本を読んでいたのだろうか。

実は小学生よりもっと前の幼いころから本を読むという経験が日常の中にあった。一つ下の弟にお姉さんぶってよく絵本を読み聞かせていたのだ。母が「ひらがなもまともには読めないのに偉そうに読んでいたよ」と言っていたのを思い出す。字が読めなくて、母が弟に絵本を読んでいる言葉を覚えて同じように読み聞かせていたのだ。母が読んでくれた絵本の内容が面白くて、私も繰り返して読んでいたのだ。そのままたま覚えてしまったのだから、本を読む楽しさを知ったきっかけはそんな家族との日々の中にあつた。

図書館リニューアル

夏休み中に図書館が少し変わりました。閲覧室の蛍光灯がLED照明に変わり、館内が明るくなりました。本数も増え、陰になっていて暗かった書架も明るく照らされ資料が探しやすくなりました。

また、入口に設置している新着図書コーナーの書架が増えました。今書架はすぐにいっぱいになり、一般書架に図書を移動していただきました。これからは新着図書を紹介する機会がより多くなりました。より快適にご利用いただけます。図書館をお待ちしています!!



閲覧室



新着図書コーナー



には市の図書館の分室があつたから。土曜日の午後と日曜日はほとんど毎週通っていた。好きな時間だけ本を読んでおくことができたので、閉館する時刻まで本を読んでいたものである。しかし、小学校の六年生で転校し、担任の先生の影響でバスケットボールをはじめたことが今まで放課後は図書室に行っていた習慣が、すっかり体育館や運動場に変わってしまった。そのような学校生活が中・高校生と続いたので、しばらく読書とは無縁の生活を送っていたこととなる。

だが、20代前半の頃に何かのきっかけで、本屋さんに久しぶりに立ち寄った時に目に留まったシドニー・シェルダンの「真夜中は別の顔」が私を再び読書に夢中にさせた。上下巻とある本だったが、1日の上巻を一気に読み終えてしまった。こんなに一気に最後まで読んだのはほんとは何十年ぶりのことだった。物語の展開が気になったのである。次の日また本屋さんに行って下巻を買った。ついでにシドニー・シェルダンの本を何作品か買い込んだ。何がそんなに私を引き付けたのか、しばらくは寝る間も惜しんで読み続けたものだった。そのころは仕事が忙しく、家と職場の往復で日々が終わっていた。少し離れた空想の世界に浸ることができ、なんともいえない心地良さを感じていた。